

ワードの

「死後の世界」

初出「ワードの『死後の世界』昭和63年

J. S. M. ワード 原著 / 浅野和二郎 原訳

桑原啓善 編著 イラスト コウ

桑原啓善は日本の正統な心霊研究を浅野和二郎、脇長生の門で学び、シルバー・バーチやホワイト・イーグル等をいちはやく翻訳紹介するなど、戦後日本のスピリチュアリズムを牽引しました。

本稿は桑原が、世界的に有名な霊界通信をわかり易いように圧縮して新しく書き直した、『ワードの「死後の世界」』（初出1988年）の冒頭部分です。



目次

旧版の序文

前編 「叔父さんの住む霊界」

第一章 不思議な夢

第二章 叔父さんの臨終

第三章 煉国の学校

第四章 夕陽の国

旧版の序文

これは物語ではありません。小説のように面白く、劇画のように変化に富んでいますが、決して、つくられた物語ではありません。ほんものの霊界通信、すなわち、真実の死後の世界の姿を伝えたものです。イギリスのワード氏が自動書記という方法で、霊からの通信を受け取ったもので、世界で最も広く読まれている霊界通信の一つです。日本でも浅野和三郎氏の名訳で、ワードの「死後の世界」としてよく知られています。本書は若い人々に読んでもらう目的で、原著を圧縮して、新しく書き直しました。しかし、あくまでも原著に忠実に、真実を伝えるように配慮しました。霊界通信としての本書の特色は、地獄の模様を生々しく伝えていることです。それも、地獄のどん底までおちて、そこからもう一度はい上がって来た人物の体験を、そのまま伝えているので、まさに真にせまり、全体が小説のように波乱に満ちています。

ただ、読者の方々に知っておいていただきたいことは、地獄はたしかに存在していますが、死後の世界というのは広く深く、なかなか一筋縄ではいかぬ、というこ

とです。すなわち、死後の世界というのは、物質世界のように、つくりつけの世界ではないのです。「心」がつくる世界です。ですから、人の心がそれぞれ違うように、その世界は沢山あるということです。従って、本書の陸軍士官が経験した地獄は、彼にとつては真実そのものでしたが、誰にとつても、何から何まであのとおりだとは限らない、ということを知っておいて下さい。また、心がつくる世界といつても、ふわふわした夢の世界ではありません。世界で心ほど真実なものはありません。ですから心をつくる世界は、死後の霊にとつては、地上で私達が経験するのと同じように、現実そのものです。

また、心が真実なものであるのと同時に、もう一つ、心にはすべての人に共通した性質があります。従って、心がつくる死後の世界には、左記のような真実にして共通の性質、すなわち法則があります。

① 人が死後に入る世界は、心の程度（清らかさ、または罪けがれ）に応じて、天国から地獄まで、沢山の階層に分かれていること。

② 心が浄化すれば、その住む世界も上方へと進歩すること。

③ 心が暗く汚れている人には、現実在地獄が存在すること。その見る風景や、経験する出来事は人によって違うが、下層ほど暗く苦痛であることは、共通

していること。改悛と心の浄化で、そこから脱出できること。

右のような法則からおしはかる時、陸軍士官が経験した、「どん底の闇地獄」「鬼に追われる地獄」「残忍地獄」「欲望地獄」「唯物主義者の地獄」「にせ紳士の俗物地獄」、このように、同じ心の人が集まって、同じような苦しみを経験している世界がないとは言えません。同じように、叔父さんの住む「夕日の国」(半信仰の人々の国)、その上の「黎明の国」(信仰心をもつ人々の国)、更にその上の「常夏の国」(確信をもつ人々の国)も、ないとはいえないでしょう。更に更に、火の壁(第二の死)を越えて、すばらしい天国が実在していることも、十分に考えられます。

私達は、肉眼で見えぬものが見えず、肉眼で見たもの、つまり物質世界しかないと思つて生活していますが、本当は肉眼で見えないところに、私達の知らない霊の世界があり、私達は死ぬと、滅びることなく、霊となって霊の世界に入って、自分の心の美しさや清らかさに応じて、それぞれの生活を続けるのではないのでしょうか。

また、この現実の物質世界の生活においても、たとえば霊の憑依(ひょうい)を受けたり、または色々な霊からの影響を受けながら、生きているのではないのでしょうか。もしそうだとすれば、私達は考え方を改めて、もっと霊のことを知らねばなりません。そ

れも、正しい霊の真実を知るように、勉強せねばならないと思われます。それが自分の幸福であり、また、世界が良くなるための大切な道ではないでしょうか。

本書の「死後の世界」は、そういう意味で、正しい霊の知識を与えてくれるものです。どうか、本書が広く沢山の人々に読まれるようにと希望しています。

一九八八・八・二七

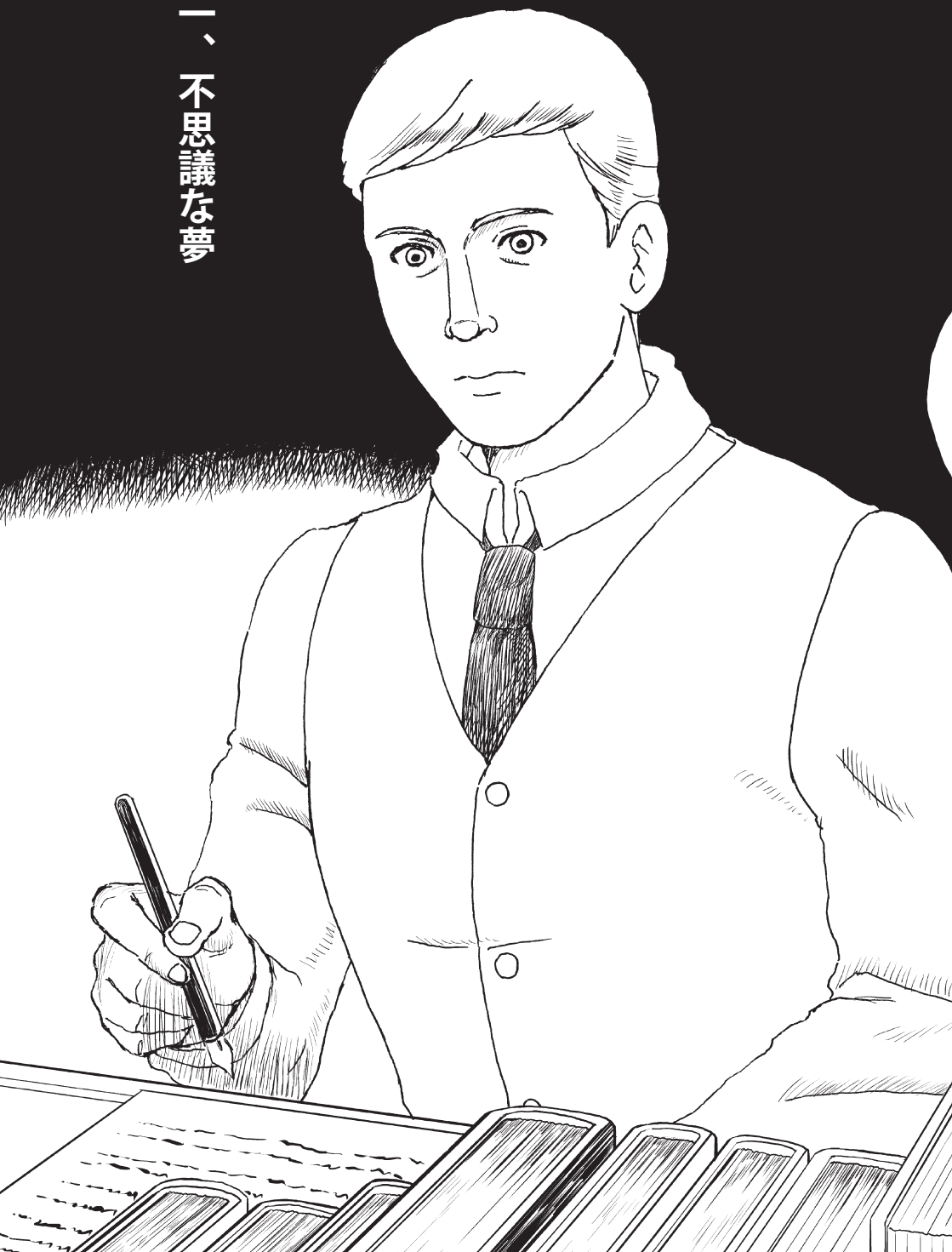
編著者 記



前編

叔父さんの住む霊界

一、不思議な夢



一九一四年一月五日、月曜日、ワード氏の叔父さんは、八十才の誕生日を迎えたその日に亡くなりました。

実は、その一カ月前に、ワード氏は叔父さんの亡くなる夢を、ありありと見たのでした。それは叔父さんの臨終から、お葬式の模様、それに、自分自身が式に参列している姿まで、はつきり見えたのでした。その時の悲しい気持、また、お悔みに来た人達の表情や言葉まで、はつきりと胸にきざみつけられて、覚めてからも消えないのです。で、そのことを妻のカーリーに話すと、ではすぐロンドンへ行ってみましょう、ということになったのですが、あいにく、カーリーが急病になったので、とうとう行けないままになっていました。

ですから、一月五日の朝、叔父さんの死の知らせを受けると、ワード夫妻はとるものもとりあえず、ロンドンへ急ぎました。

でも、ロンドンへ着いたワード氏は、何もかもびっくりすることばかりでした。実は、お葬式の模様といい、集った人達の顔ぶれや、挨拶の仕方といい、それに棺に眠っている叔父さんの顔付きまで、夢で見たのとそっくりだったのです。

あまりのショックに、ワード氏はそれから何日も悲しい日を送りました。

ところが、叔父さんの死から一週間目、一月十二日の月曜日、夕方のこと、たまた

ま母のカーリーと庭に出ていた、五才になる娘のエディーが、急にこんなことを口ばしりました。

「あれ、あんな所におじい様が。ほれ、いつもの黒いズキンをかぶって。あ、こっちへふわふわ降りて来るわ。」

「アラ、ご機嫌ようだなんて、おかしいわ。ホレホレ、もうあんな所で、おじい様つたら、お星様をまちがえて、お花のように摘んでいるわ。」

これは、きつと熱のせいだ、とカーリーは思つて、エディーを部屋につれていつて寝かせました。

ところが、その夜のことです。ワード氏は不思議な夢を見ました。急に、寝室の中がほの明るくなったと思うと、叔父さんの顔が現われました。それは生きてる時の顔と似ているのですが、どこか違う。そう、生顔と死顔をちゃんぽんにして、二で割つたような顔です。その叔父さんが口をひらいて、こう言うのです。

「初めは、娘のカーリーに通信しようと、やってみたのだが、あれは鈍感でいつこうに駄目だ。孫のエディーには見えとつたようじゃが、あ、小さくては役にたたん。で、こんどはお前に試してみたんじゃが、お前はテレパシー能力があるとみえて、これこ

の通り大成功じゃ。」

叔父さんは、嬉しそうにニッコリしました。

「では、夕方、エディーがおじい様を見たと言ったのは、本当だったのですか。お星さまを集めて、花束にしていると聞いたのは。」

「そうじゃ、わしじゃ、本当じゃ。じゃが、星を摘んだのではない。花じゃ、靈界の花は、星のようにきれいだから、うっかりエディーは見違えたのじゃろう。」

「で、叔父さん、貴方は今何処に居られるのです。その靈界とやら、ですか。」

「そうじゃ、そうじゃ。これこの通り、わしは靈界でピンピンしておるわい。」

そう言うと、叔父さんの顔は、心なしか、生前より若やいで、生き生きと見えました。

「で、そのことじゃ、人は死んでも死なぬということじゃ。わしはこっちの世界へ引越して、初めてそれを知った。で、その喜びを、お前達にも分けてやろうと思つてな。そうじゃ、わしの葬式の日、お前もカーリーも、すっかりしおれていたな。カーリーのやつ、わしの死に顔を見て、オイオイ泣き出しおつて。そうしたら、お前はハンカチをとり出して、カーリーの手に持たせてやったな。」

「オヤ、叔父さんは、なぜ、そのことをご存じのですか。」

「それ、それが、わしが生きておる何よりの証拠じゃ。わしとは、ホレ、今ここに居

「これがわしじゃ。死体は、いわば、わしの脱け殻じゃ。」

「では、カーリーは、その脱け殻に、涙をこぼしていたわけですか。」

「さよう。それが不憫ふびんでな。いや、おかしくもあるし。わしはそばに立っていて、やきもきしたもんじゃ。」

「すると、叔父さんは、お葬式の日のごことは、何もかも見ておられたのですか。」

「そう、何もかもじゃ。それに、わしはわしの臨終についても、見て何もかも承知している。いや、それについては、またゆつくり話すでしょう。ともあれ、今日は、お前と通信ができて、まことに満足じゃ。では、次の月曜日を待っていておくれ。それがわしの誕生日で、また命日じゃからな。」

それから、ワード氏はぐつすり眠りにおちたのか、翌朝は、いつものように目が覚めました。でも、頭には昨晚のことが、まざまざと焼き付けられていて、いつまでも忘れられませんでした。

二、叔父さんの臨終



一月十九日、月曜日。ケンブリッジ大学講師のワード氏は、講義の準備に夜を過ごしました。で、夜更けて床につく頃には、先週の夢のことは、すっかり忘れていました。でも、その夜のことです。また部屋の中がほの明るくなると、約束通り叔父さんが出現しました。その夜の叔父さんは、前回より、よほど若々しく見え、生前お気に入り、粗いチェックの背広を着こんで、初めからニコニコとご機嫌でした。

「どうじゃ。約束どおり現われたであろう。」

「そういえば、今日は月曜日ですね。」

「さよう、わしの誕生日じゃ。」

「誕生日ですって？」

「そう、人は死によって新しく生まれるのじゃ。」

「生まれるのですか。」

「そうじゃ、生まれるのじゃ。このわしを見てごらん。」

「そういえば、今日は、よほど若く見えます。」

「ウハ……そうだろう。これが証拠じゃ。」

「ナニ、死とは恐ろしいものではない。不用な肉体を捨てて、魂になる。つまりホンモノの自分に返ることじゃ。分かるかね。いや、こんなことを言っても、お前には無

理じゃろう。よろしい、今日は、わしの誕生、つまり臨終の話をしよう。」

そう言つて、叔父さんは、さも楽しい思い出を語るように、傍の椅子にゆつたりと腰を下ろしました。

「あの時……」叔父さんは、ほんの一瞬だけ、眉をくもらせて、『苦しいと思つたのは、ほんのちよつとの間じゃつた。わしはすぐに、意識を失つたらしい。そのうち意識が少し戻つてきた。いや、そんな気持ちになつた。するとどうじゃ。頭が妙にすつきりして、近年にない気分じゃ。だが、どうにも身体だけが重い。すると、その重みが少しずつ消えていく。いや、消えていくというより、自分がその重みの中から、抜けていく気分じゃ。丁度、濡れ手袋から手首を引張り出すようにな。すると、不意に一端が軽くなり、眼がたいへんきいてきた。

さつきまで、さつぱり分からなかつた室内の模様だの、集まっている人達の姿だのが見えてくる。と思つた瞬間、わしは不意に、自由自在になつてしまつた。するとどうじゃ、目の下の寝台の上に、わしの身体が横たわっている。その口からは、銀色のキラキラした紐を吐いている。と、その紐が、一瞬ピリピリと振動して、プツツリ——と切れてしまつた。

「これで御臨終でございます。」誰やらがそう言つと、ワツとまわりで泣き声がおこつ

た。その時、わしは初めて、自分の死顔をはつきり見た。いや、それは何とみっともない貧弱な物体だろう。これが今まで大切にしてきた自分の顔かと思うと、情けないやら呆れるやら。しかるにじや、皆はその物体にとりすがって、オイオイ泣いている。わしはこっけいな気分になって、

「オイオイ、わしはこっちじや。」と大声でどなったが、誰もきいてくれん。そこで、傍にいた家内の肩を、ポンと叩くんじやが、手が肩を通りぬけてしまった。あわてて、二三度叩いたが、家内はいつこうに気付かぬ様子で、かえって、わしは身体ごと、家内の身体を通りぬけてしまった。

その時じや、何とも名状しがたい寒さが、ひしひしと押し寄せてきた。いや、その寒さといったら、とても口では説明できん。何が冷たいといって、これに比べられるものは、人間界にはない。いわば、孤独の冷たさ寒さ。いや、その永かったこと。ブルブル、ガタガタ、まるで何十年も、そうやっていようじやった。

と、急に、その寒さがうすらいできた。ふと気が付くと、誰かが、わしの傍に立っている。いや、その姿を説明せよといっても、わしにはできん。

その時は、無我夢中だったから、とんと、見当もつかなかったが。その後、しばしばお目にかかるので、漸く分かってきたが……いや、それとても分かるなんてものじや

ない。とにかく、そのお顔といい、お召物といい、お軀からだといい、時々刻々に変化するのじゃ。光り、キラメキ、輝き。それでいて、全体に、言うに言われぬお優しい、温かい、しかも凜とした気品が漂よっているのじゃ。

わしは、これは「天使じゃ」と悟った。と、その瞬間じゃ、何ともいえぬ懐かしい気持ち、ひしひしと押し寄せてくる。わしは、もう何十年何百年も、このお方と一緒に居たような気持ちになった。いや、てつきりそうじゃ。このお方は「わしの天使さま」じゃ。そう思ったとたん、今まで居た部屋も、部屋に集まっていた人達も、急に消え失せてしまった。そしてふと気が付くと、わしは何ともはや美しい景色の中に立っていたのじゃ。

こりゃ何という景色だろう。わしの見た名所旧蹟に似ておって、ぜんぜん違ったところもある。見渡すかぎりの丘つづぎに、点々と森があり、草が茂っている。さまざまの動物が走り、蝶が舞い、あらゆる種類の花が、いつせいに咲いている。熱帯産の椰子の木があるかと思うと、傍に英国産の檜の木が茂るというふうで、しかも、妙に調和を保っている。

いったい此処ここはどこだろう。地上かしら、わしはまだ死んでおらんのかな。そう心にいぶかった。すると、わしの天使は、すぐにわしの心を察して、「此処は死後の世界

である。そなたは山川や草木があるから、不思議に思うらしいが、霊の世界は無形の世界ではない。これまで地上に在ったものは、亡びると、みなこちらの世界に形を現わす。」

そう聞いたわしは、では、思想もやつぱりこちらに現われるかしら、と疑った。と、その瞬間、目の前の光景が、パッと消え失せ、かわって何やらしらんが、千万無数の幻影が、あっちからもこっちからも、によきによき、めきめき這い出し、生え出して、たちまちわしをとり囲んでしまった。いや、その時の苦しさ重さ。わしは、幾千万トンの重荷に、押しつぶされたあんばいじゃった。

それを幻影と言ったが、実は、みな実体があるのじゃ。しかもじゃ、よく見ると、それが皆わしの生涯の出来事じゃ。それが映画のように、目の前に再現される。どんな小さな事も一つも省かれることなく、しかも、それが何の順序連絡もなしに、いつせいにパッと展開する。いやその時の、恥ずかしさ辛さ苦しさ。わしは赤面で、満身から血が吹き出す思いで、幾百千年もそうやっていようじゃった。

と、その時、わしの心に、天来の福音がひらめいた。「祈つてみよう」。そうじゃ、わしは生まれて初めて、神に祈る気を起こした。で、一心不乱に、神に祈りを捧げた。するとどうじゃ、あれほど混沌としていた風景が、しぜんに整理され、類別されていく。

そして、とうとうしまいには、年代順に並べられて、まるで一つの街道のようになった。で、その街道が、先へ先へとつづいて、行先は神の裁きの^{にわ}廷に達するというあんばいじゃ。

はて、わしはどうしたものか、と思案していると、不意にわしの天使様が現われなされた。そして、「ついて来い」とおっしゃる。わしはいそいそと、その後に従った。

天使様はずんずん進まれ、不意に数ある景色の一角を横切りなされた。と、どうじゃ、今までであった景色がみるみる消え失せ、わしらは、とある田園の中に立っていた。われわれは、更に野を越え川を横切つて、とうとう丘の頂きに達した。見ると、目の下に、広々とした田園風景がひらけ、そこに、一棟の立派な建物がキラキラ光って見えた。

「あれが、これから、そなたが入学する学校じゃ。」

天使様は、建物を指さしてそうおっしゃった。

「え、私が学校に、でございますか。私はもう子供ではございません。」

「いや子供じゃ。私の目から見れば、まるでみどり子じゃ。」

そう言われる間に、天使様の背丈は、ずんずん高くなって、それに比べれば、わしの身体は、まるでケシ粒のように見えた。

で、わしはすっかり恥じいって、低く頭をたれた。すると天使様が、

「ここは煉国である。そなたは多少の信仰があるから、此処に入ることができた。もし一片の信仰もなければ、この下の地獄に入るところであった。そなたは、これから学ばねばならぬことが沢山ある。せいぜいしっかりとやりなさい。」そう言い終ると、天使様の姿はプイと消えてしまった。

またしても、わしは一人きりになってしまった。でも今度は、少しも淋しくない。かえって凜々とした勇気がわいてくる。まるで小学校に入る子供のように、目の前の学校を見ていると、妙に胸がわくわくしてくるのじゃ。

こうして、とうとう、わしの煉国での第一歩が始まることになった。いわば、わしの二度目の誕生じゃ。これから先のことは、又、次の回の楽しみにしてもらおう。お前もだいたい疲れたようじゃ。では、今晚は、これでお休み。』

そう言うのと、叔父さんは立ち上がり、右手をワード氏の額に、そつとあてがいました。それきり、ワード氏はいつものように、深い眠りにおち入ってしまったようです。

三、 煉国の学校

